

## 「ごめんねありがとう イエスさま」

### テモテへの手紙― 1章15～16節

聖学院中学校高等学校 副チャプレン 百武 真由美

やはり、失敗する人間はだめなのでしょうか。よい点数を取らないと、よい振る舞いをしないと、人として十分ではないのでしょうか。思い通りにできなかつたり、言われた通りにできない人は、失格なのではないでしょうか。

私たちが生きていて、うまくいかないこと、間違ってしまうことは、どうしても避けることができないのであろうと思います。これまでの人生で一度も失敗したことのない人は、今朝この講堂に集まっている人全員の中で、きっとひとりもないのではないのでしょうか。みんな、自分で願ったにしろそうでなかったにしろ、あるいは大小さまざまに、失敗をし続けているのだと思います。それは、中高生も、大人も同じです。すべきことをせず、言わなくていいことをわざわざ言い、不必要に人を傷つけ貶め、自分自身や周りを裏切りながら生きている。それが私たちの毎日の現実ではないか、と思います。

学校にいと、失敗したときに、注意されることがあります。失敗の内容によっては、厳しく叱られるときもあるかもしれない。わたくしも、自分自身が毎日失敗の連続ですから、注意され、叱られ、諭されることの連続ですし、同時に生徒のみなさんと生活する中で、みなさんの失敗に物申すこともあります。でもそのたびにいつも思うことがあります。

「今、イエスさまなら、どんな風におっしゃるだろうか？」

そんな風な疑問がわいてくるのです。イエスさまなら、この失敗を見て、どなって叱ったのだろうか？ 泣いて悲しんだのだろうか？ 黙っておられるのだろうか？

聖書の中にも、失敗を犯す人々が大勢出てきます。今朝のみことばを著したパウロという人も、かつてはとんでもなく失敗だらけの人でした。しかもその失敗は、途方もなく深刻なものでした。というのも、パウロが犯し続けた失敗は、イエスさまを認めず、イエスさまを信じるキリスト教徒を片っ端から捕まえては迫害する、という行為だったからです。彼は、すべきでないことをしました。神を正しく信仰する人を真っ向から否定して、暴力をもって彼らの考え方を変えさせようとしていました。言ってみれば、パウロは神を信じる人を否定することで、神さまご自身も否定していたのです。そうやって、自分の考えが何よりも一番正しい、と信じて疑いませんでした。自分の考えが正しい、そうパウロは自己中心になって、あたかも自分の考えには間違いが一切ないかのように信じこんでいました。けれども実は、自分には間違いがないと思いついでいること自体が、大きな間違いだったわけです。だからパウロは、昔の自分自身を振り返って、「自分は『罪人の中で最たる者』だ、罪人のリーダーだった」と言っています。

ところで、イエスさまはこんなパウロのことを、どう思っておられたのでしょうか。パウロ自身が言うこと、それは「イエスさまは、こんな失敗だらけの自分に、限りない忍耐を示してくださった」ということです。イエスさまは、パウロを怒鳴りつけたり、なじったりはなさらなかった。自己中心になって自分をあたかも神のようにしていたパウロのことを、じっと忍耐しておられた。というのです。

イエスさまは、自己中心のパウロを忍耐して、憐れんでおられた。だとしたら、イエスさまはパウロと同じように自己中心で自分勝手な部分のある私たちのことも、忍耐してじっと黙って待っておられるのではないのでしょうか。失敗したからと言って、「お前はもうだめだ！」などとは言わずに、その間違いに私たちが気づくのを待っておられるのではないのでしょうか。

子ども向けの讃美歌のひとつに、こんな歌詞があります。小さな子どもがイエスさまに質問をする、という歌詞です。

「ある日 イエスさまにきいてみたんだ どれくらいぼくを愛してるの？  
これくらいかな？ これくらいかな？ イエスさまは黙ってほほえんで

もう一度 イエスさまにきいてみたんだ どれくらい僕を愛しているの？  
これくらいかな？ これくらいかな？ イエスさまは優しくほほえんで

ある日 イエスさまはこたえてくれた しずかに両手を広げて  
そのてのひらに くぎを打たれて 十字架にかかってくださった  
それは ぼくの罪のため  
ごめんね ありがとう イエスさま」

きっとこのちいさな子どもは、自分が間違いや罪を含み持った存在であることに、薄々気づいていたのではないかと、思います。だから、こんな僕のことをイエスさまはどう思っているんだろう？ イエスさまは僕のことを怒っているのだろうか、嫌っているのだろうか、叱りたいのだろうか、と心配で気がかりで、「どれくらいぼくを愛してるの？」と質問したのだろうと思います。そんな子どもに、イエスさまは決して厳しい言葉をかけたりしません。「黙って」おられるだけだったのです。ただし、その手には、罪を赦すための十字架の傷が、深く深く刻まれていました。

これがイエスさまの忍耐ではないのでしょうか。失敗したからと言って失敗扱いせず、その罪に気づくまで静かに待っておられる、ただし、十字架の痛みをもって待っておられる、それがイエスさまの忍耐ではないのでしょうか。だから、イエスさまが忍耐して待っていて下さる限り、私たちは失敗したからといって、それですべてがおしまい、ということではないはずです。イエスさまが待ち続けてくださっている限り、私たちは赦され続けているのですから、私たちも自分自身の罪を見つめる責任があるのではないかと、思います。今日も、イエスさまは私たち一人ひとりに忍耐してくださっています。忍耐されている、すなわち見捨てられておらず、失敗してもイエスさまによって受け入れられていることを覚えて、今日を過ごそうではありませんか。

祈りをささげます。

神よ、罪絶えない私たちを、忍耐をもって待ち続けて下さるイエスさまに、今日私たちがお応えすることができますように。十字架のイエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。

2014年6月14日 聖学院中学校高等学校 全校礼拝